

□書 評□

東京大学医学部病理学教室 太田邦夫編集

「電子顕微鏡による細胞組織図譜」

第6巻 腫瘍

広島大学学長（病理）

飯島宗一

「電子顕微鏡による細胞組織図譜」（山田英智・内菌耕二・渡辺陽之輔総編集）の第6巻として「腫瘍」の編が刊行された。この巻は太田邦夫教授の編集によって成り、小野江為則教授以下86名の執筆者が参加した。執筆者のなかには台湾大学、南カリフォルニア大学など若干海外の大学の研究者も加えられている。内容は総論と各論より成り、総頁372頁、偶数頁が説明および記述に、また奇数頁はすべて写真にあてられているから、およそ340の図版を収載して、A4版の堂々たる図譜である。最近、類書は皆無というわけではないが、腫瘍一般を内容とする電子顕微鏡図譜としては、内容、体裁とも第一級の書物ということができ、基礎・臨床を問わず、腫瘍学に関心をもつ専門の人々にとって好個の参考書であるばかりでなく、ひろく生物学にかかわる人々にも有用であろうと思われる。

ただ、私は全巻の内容を通覧し、さらに太田教授の序文を拝見して、図譜という形での、腫瘍の電子顕微鏡的取扱いの表現と整理のむづかしさをあらためて痛感した。腫瘍形態学への電子顕微鏡の導入において、究極的に期待されるのは分子レベルでの構造と機能の相関に即しての「腫瘍」の理解であり、序文の言葉

を借りれば「動的な病理学的特徴や生化学的動態の場の同定」であろう。そして、それは「総論」において整理・表現されるはずのものである。しかし、太田教授もいわれるように実は現状では「総論、は各論領域での所見の抽象であるが、残念ながらまだ望むべき多くのものをのこしている」これは、本書の場合でも決して「総論」執筆者の不勉強ということではない。否、むしろこの本の総論には、石川栄世教授らの腫瘍細胞核への正面からのアプローチを中核に、小野江教授ら、菅野博士らの力作が組込まれ、腫瘍ウイルスについても一流の担当者の寄与がある。それにもかかわらず、あるいはむしろそれ故にこそ、この領域になお「望むべき多くのもの」があることをあらためて思い知らされるのであり、その意味でこの本の総論はひとつの道標として評価されよう。

人体腫瘍を主体とする「各論」のむづかしさは、人体腫瘍の電子顕微鏡的経験にさまざまな制約がある反面、多数の経験例を図譜的表現のため選択することにあると思われる。幸いこの図譜では、数十名にのぼる多くの協力により、人体腫瘍各論としてほぼ組織的に主要項目がととのえられることになった。このことは本書における一大収穫であるといわ

なくてはならない。そのため、若干の写真については技術的・質的瑕瑾を見出すにしても、それはしばらく了恕すべきである。一方、電子顕微鏡的腫瘍各論を図譜的表現としてどのような目途で、どの程度くわしく扱うかもつねに問題であり、極端に言えば、ただ1種の人体腫瘍についても、この本と同じ量の図譜をつくりうるものであり、ある見方からすればそれでも不十分を感ずることすらあるであろう。また、扱われる腫瘍の種類により、電子顕微鏡的アプローチの目指すもの、その問題点も必ずしも均質ではない。それ故、この図譜の場合にも、これをどのように読み、どのように用いるかによって、なおいろいろ注文の余地はあると思う。しかし、私自身は、この図譜を通覧してあらためて学びえたところがはなはだ多かった。そして、写真と記載をこのレベルにまでととのえることに示された編者の視野に敬意を覚えた。あとはむしろこの図譜を土台にわれわれがさらに何をつくり上げてゆくにある。

現状におけるひとつのスタンダードを提供する力作として、この図譜をひろくおすすめしたい。

A4 頁343 写真340

¥14,000 円250 医学書院刊